

〔宮川舍漫筆〕切疵奇藥

何草にても、三品一所に揉て、其液を草の儘付る、即時に愈る事妙なり、但しひな草一種は除て、其餘は何草にてもよろし、

右は、我等普請せし折大工の手傳、過て怪我せし處、この大工すぐ様草三品一所に揉、疵口へすり付候處、見る間に血とまり愈たり、此者いふ、我生れし田舎にては、切疵いかやうの深疵にても、この三品の草にて速かに愈るなり、何草にても宜しと、實に手輕の仕方故也、

右の外にも種々の名藥あれども、其場にて用ゆる事ならず、藥種調合のうへの藥なれば、是賣藥に類して、手重なれば略す、

〔雲萍雜誌〕蘇鐵の葉の枯たるを黒燒にして、胡麻の油に和し、たくはへ置べし、金瘡切り疵にはいかほどのことにて、酒にて洗はずに愈ること妙なり、楠正成が家の法なりとて、左海大松屋のあるじ、予に傳へたり、予が友中根彌次郎といふもの、遺恨によりて切られし時、ふかさ四寸ばかりの疵口へ、この藥をつけて、忽に全快せり、

〔本朝醫家古籍考〕金瘡療治抄

此書一卷、寫本ニテ、四天王寺文庫中ニアリ、相傳ヘテ、楠公自筆ノ本也ト稱セリ、怪ムベキ様ナレドモ、奥書アリ、如左、○中略

金瘡書ニ、畠山氏之傳ト稱スル物ト又吉益流トモ稱ス世ニ多シ、何ノ時ニ成リタルヤ、詳ナラザレドモ、何レ戦國ノ物ト見ユ、又上州富岡ト云ヘル所ニ、武田家信玄ヲ稱ス金瘡書ト云フ物ヲ藏スル人アリ、甲櫃ノ中ヨリ取出シタリト云、此類モ又マ、アリ、又産前後金瘡ノ類ヲ血ノ道ノ七氣ト稱シテ、古クヨリ一家ノ事ト成リシ、其治方ヲ載セタル書マ、アリ、多クハ皆二三百許ノモノナレドモ、猶古クヨリ傳ヘシモ有ベシ、